

追悼 Thomas Cavalier-Smith 先生

矢吹 彬憲 (海洋研究開発機構)

原生生物学の世界的権威であり偉大な牽引者であった Thomas Cavalier-Smith 先生 (オックスフォード大学, 英国) が 2021 年 3 月 19 日に亡くなられた。Cavalier-Smith 先生は、圧倒的な知識と柔軟な思考から数多くの学説を提唱し多大なる業績を残されてきた。それらの成果は、高い評価を受け 2004 年には国際生物学賞, 2007 年にはリンネ・メダルを授与されている。先生の逝去は生物学全体にとってとても大きな損失であり、また大きな悲しみである。心よりご冥福をお祈りしたい。

Cavalier-Smith 先生は、1942 年に英国・ロンドンで生まれ、1967 年に緑藻クラミドモナスを材料としその微細構造や細胞器官の生活環を通じた挙動に関する研究でキングス・カレッジ・ロンドンにおいて学位を取得されている。その後、米国・ロックフェラー大学でポストドクを経験し、またキングス・カレッジ・ロンドンで教鞭を振るわれた後、1989 年からはカナダ・ブリティッシュコロンビア大学にて研究室を主宰した。ここでは、真核生物の初期進化に関するアーケゾア仮説や光合成生物の多様化に関するクロムアルベオラータ仮説といった現在の生物学を語る上で欠かすことのできない重要な学説を提唱されている。1999 年には英国・オックスフォード大学に移り、真核細胞の進化や成立について重要な研究を牽引され続けた。ここでは細胞骨格系や遺伝子構造を含めた真核生物の成立と初期進化に関する数多くの研究成果を公表されている。この期間にも、ネオムラ仮説やバイコンタの提唱、また数多くの高次分類群の設立、といった非常に重要な研究成果を多数公表されている。2016 年には奥様の Ema 様と英国・コーンウォールに移り住み、自然に囲まれながら穏やかな日々の中で精力的に論文執筆を続けてこられた。ご自宅ではお庭のお気に入りの場所に座りそこに訪れる渡り鳥を眺めるのを楽しんでおられたと奥様から伺っている。優しいお顔をされた先生のお姿が浮かぶ。

筆者は、学生時代に師事していた石田健一郎先生が過去に Cavalier-Smith 先生の下でポストドクをしていたご縁から共同研究を実施するに至り、博士後期課程在籍時には Cavalier-Smith 先生の研究室に半年ほど滞在し研究指導いただいた。その後も折に触れ目にかけただき、先生には感謝しかない。先生との思い出は数多いが、印象に残っているエピソードをここで 1 つだけ紹介したい。ある学会で分類体系の安定性の議論になったときに、先生は「これはサイエンスなのだから、状況に応じてその都度また変えれば良い (矢吹訳)」とおっしゃられた。こう文章に書いてしまうと伝わらないかもしれないが、この発言に私はあらためて強い衝撃を受けたことを今でも鮮明に覚えている。

分類は慎重に検討し広く受け入れられる妥当な系を提示すべきである、と考えていた私に対し、慎重に検討した上で妥当な系を出したとしてもそれを躊躇わずに改定していくのがサイエンスなのだと諭してくれた訳である。これを当然のこと・自然なこととして言える先生のサイエンスに対する向き合い方、そしてそれを数多くの論文公表という形で誠実に実践しておられるお姿に改めて感銘を受けた。私がこの言葉を説得力を伴いながら後進に伝えるにはまだ時間がかかりそうだが、その目標は忘れずにいたい。先生が残された学説はこれからも原生生物学における中心的な議題であることは間違いない。先生の素晴らしい業績と貢献に改めて敬意を払うとともに、ご冥福を今一度お祈りする。



2004 年に国際生物学賞を受賞された際、当時の天皇・皇后両陛下より御祝辞を受ける Cavalier-Smith 先生 (奥様 Ema 様よりご提供)



2017 年アイスランドにて (奥様 Ema 様よりご提供)。ご趣味であられたバードウォッチングの途中であろうか、双眼鏡を持っておられる。